

薬学用語辞典

日本薬学会

薬学用語委員会編

藥學用語辭典

日本藥学会

藥學用語委員會編



東京 廣川書店 發行

序

薬学の領域は広くその構成単位としては有機化学，生物化学および物理化学の三基礎学の上に応用学としての，たとえば薬剤学，生薬学などの薬学のいわゆる専門学がある。したがって薬学の領域で使用される用語は当然基礎化学，生化学，物理化学，医学，動植物学などの用語と密接な関連がある。ただ従来より薬学独自の用語としては法的に規定されたとみなされる薬局方の用語があり，また薬学の専門学である薬剤学および生薬学の用語は古くより統一の努力がなされ，さらに昭和 36 年薬学用語委員会が発足して以来，慎重な検討が加えられてこれらの用語は確立した。

広く薬学の領域を包含する統一用語，すなわち薬学用語の制定は是非とも達成しなくてはならない課題である。しかし現段階においては関連分野の用語との比較検討，薬学のそれぞれの専門分野における用語の調整統一などの点は必ずしも十分に検討されておらず，薬学用語彙を発表するにはなお残された問題が多い。したがって本書は薬学用語辞典の形をとり，内容は現在の薬学領域で使用されている用語をあげそれに解説を加えたものとした。将来の諸賢の御協力によりさらに改善してゆき最終的には薬学用語制定の基盤としたらう。

薬学用語委員会は発足以来すでに十年，また本書の編集に着手し

てからも五年の年月を費した。この間、薬学用語の検討、本書の編集に関して労を煩わした薬学用語委員兼本書編集委員、ならびに有益な御意見をお寄せ下さった諮問委員の諸氏に厚い感謝の念を表明したい。また薬学用語に対して最も深い関心をもたれ本書発刊に努力された故福地言一郎委員に衷心より感謝を捧げるものである。

なお本書の出版に際して御尽力いただいた株式会社廣川書店また印刷、組版に非常なお手数を煩わした新日本印刷株式会社に厚く御礼申し上げる。

昭和 46 年 5 月

日 本 薬 学 会
薬学用語委員会委員長

岡 本 敏 彦

出版経過について

昭和 35 年暮より文部省では學術用語集化学編の増改訂審議をはじめ、以来約 10 年を経過してはばその作業を終わろうとしている。日本薬学会においても同専門部に伊藤四十二、岡本敏彦、福地言一郎の三氏を代表としておくり、新化学編に薬学関係用語を収載すべく強く働きかける態勢をととのえた。

昭和 36 年日本薬学会は薬学用語の統一と制定をはかるため薬学用語委員会を結成して検討に着手、昭和 37 年 9 月同委員会に各専門分野における分科会（小委員会）を設け用語の検討を行ない、さらに薬学用語の成案を作成して文部省の學術審議会に提案するという方針を決定した。

薬学関係用語中まず最初に薬剤学用語小委員会（堀岡正義小委員長）において「薬剤学用語」案の制定が完了し、昭和 38 年 4 月第 17 回薬学大会（金沢）において同委員会は薬剤学用語制定に関する報告をすると共に薬剤学用語第一案を提出し、さらに審議改訂して翌年第二案を提出した。

一方、生薬関係用語に関しては生薬学用語、薬用植物学および日本薬局方用語に関する學術用語案が昭和 38 年 11 月、藤田路一委員により南江堂、「化学の領域」に発表された。これをもとにして生薬関係用語は同小委員会において検討され薬学用語の一部として成案を得た。

薬剤学用語第二案が提出されたのを機として用語委員の代表者の一人福地言一郎氏よりその出版に関して廣川書店に交渉がなされたが廣川書店としては薬剤学用語だけでなく広く薬学領域の用語をも収載して「薬学用語辞典」として出版してはとの対案を出し、この線で了解に達した。昭和 40 年 8 月、この事業は薬学用語委員会の責任において進められ、その出版は廣川書店が委託されたものとして日本薬学会の理事会において承認された。

理事会の決定をうけて、“薬学用語辞典”編集委員会が正式に発足し、伊藤四十二、岡本敏彦、福地言一郎の三氏を編集主幹とし、各専門分野ごとに編集委員をおき、項目の選定と解説執筆の作業にはいった。基本方針として、薬剤学用語、生薬関係用語、衛生化学用語、薬局方用語等の薬学独自の用語で、すでに成案の得られているものはそれらを基本とし、また公定書に記載されてい

る用語は、それを正規のものとして採用、有機化学、無機化学、物理化学、分析化学、天然物化学、薬理学、生化学、微生物学、生理学、解剖学、病理学、放射化学等の他分野とも関係を有する用語は、現時点で薬学の研究、教育等に通常用いられているものを採用することとし多くの教科書等から採択された。ただしすでに文部省学術用語として採用されているものについては、できるだけそれに準拠するように配慮された。また、このような当編集委員会の作業が進められている一方において、日本薬学会国際十進分類法委員会が昭和 28 年以来手がけてきた UDC 615 Pharmacy (国際十進分類法「薬学部門」) の大改定が、昭和 41 年に FID によって承認され、ただちに独英日三国対照のテキストの出版が進められたが、その中で採用された日本語の用語と本書中の用語の間にくいちがいを生じないように配慮された。

用語の解説は、一項目につき原則として 100 語以内に統一したために、必ずしも簡にして要を得たものばかりでないきらいがあるが、これに関しても多くの参考書、辞典類が参考に供された。用語の選択は、編集委員会で度重なる討議によって決定され、解説はそれぞれの専門分野で編集委員の責任において執筆を依頼し、脱稿の時点で、また取捨選択が行なわれ、さらに校閲を経て完成したものである。

用語の選択、解説、いずれについても、種々の分野からの 6000 余語という膨大な項目の集成であり、内容、体裁、相互の関連づけ等で、なお不十分な点が多い。また既述のように薬学用語の制定に着手してから、本書の出版に至るまでには長期間を要したため、その間に新しい用語が生れたり、あるものはあまり用いられなくなったり、あるいはことばの意味が変わったりしたものもあるろう。しかし、所詮、ことばは生きものであるから、将来さらに取捨選択改訂を行ない、完璧なものに近づけてゆくべきものと思う。

終りに、本書の作成にあたって参考に供せられた文献類は本来すべて明記すべきであるが、あまりにも膨大な数にのぼるので、省略させていただくこととし、それぞれの著者に深く謝意を申し上げる次第である。

昭和 46 年 5 月

薬学用語辞典編集委員会実行委員

永 井 恒 司
広 部 雅 昭

編 集 主 幹

伊 藤 四 十 二

岡 本 敏 彦

福 地 言 一 郎

編集ならびに諮問委員

相 見 則 郎
安 藤 俊 夫
赤 松 稷 正
井 村 伸 勲
稲 垣 龍 雄
江 本 浩 良
遠 藤 全 精 一
男 谷 豐
粕 藤 仁
加 村 康
木

古 賀 憲 司
鮫 島 啓 二 郎
三 川 潮
塩 入 孝 之
清 水 藤 太 郎
下 村 裕 孟
下 村 善 子
田 村 裕 藏
武 田 寧
鶴 藤 丞
坪 井 正 道

寺 尾 允 男
富 田 基 郎
永 井 恒 司
長 沢 元 夫
広 瀬 聖 雄
広 部 雅 昭
福 岡 英 平
藤 田 路 一
古 谷 力
堀 岡 正 義
三 井 幸 雄

[五十音順]

凡 例

収載用語について

1. 薬学独特の用語である薬剤学、生薬学、衛生化学、薬局方などの用語に加えて、有機化学、無機化学、物理化学、分析化学、天然物化学、薬理学、生化学、微生物学、放射化学など薬学の研究教育に欠くことのできない用語を広く収載した。
2. 主として日本薬学会薬剤学委員会編「薬剤学用語」、文部省学術用語集「植物学編」（第4版）、日本薬学会、日本生薬学会制定「薬学専用薬用植物学・生薬学用語」、第七改正日本薬局方、衛生試験法、文部省学術用語集「化学編」（第21版）、日本薬学会薬学用語委員会「化学用語集（1962）」、酵素命名法、日本薬局方以外の公定書に収載されている用語（生物学的製剤基準、抗生物質基準、放射性医薬品基準、食品添加物公定書）については、日本薬局方の用語に準じて取り入れた。その他標準的な教科書より用語を選択した。

項目について

1. 項目名の見出しは太字のひらがなで示し、そのあとに漢字を付した。
〔例〕 **ばくがとう** 麦芽糖
また、生薬名はカタカナの見出しで示し、ついで漢名、漢字名、あて字名に分け、ラテン名を付した。
2. 外国語はカタカナで示した。
3. 外国語と日本語からなる複合語は、日本語にのみ漢字を付した。
〔例〕 **バイヤービリガーはんのう** ——反応
4. 日本薬局方に収載されている項目は、日本薬局方の正名を正項目としてそれに解説を付した。
〔例〕 ビタミン B₆→塩酸ピリドキシン
セネガ根(末)→セネガ(末)
5. 項目の配列は五十音順によった。同音異義の項目は、併記した英語のアルファベット順に配列した。
6. 生薬項目中（ ）内は使用しても省略してもよいもの、〔 〕内は項目の使用基原、[[〕内は当用漢字にないが用語として使用を希望したい漢字であることを示す。

外国語について

1. 各用語には原則として英語を付記した。また生薬名にはラテン語を記した。

2. 英語は原則として単数扱いとし、剤形を示すような場合には常法に従い複数とした。

〔例〕錠剤 tablet(s)

3. 英名 Mineral (o) corticoid などに使われる () は o を入れても入れなくてもよいことを示す。

解説について

1. 同一異名をもつ用語については→で異名を示し、そこに解説をつけた。

〔例〕ビタミン B₁→チアミン

2. 他項目を参考にする場合は、解説文の終わりにその項目を矢印で示した (→○○○)。
3. 見出し項目として採用したことばが解説文中にでてくる場合はそのことばに*印をつけた。
4. 生業用語のうち同項目名で二種の英語をもつ場合、英名の意味が異なるものは別個に分けて説明した。

目 次

あ行 1~81

あ	1
い	28
う	44
え	48
お	72

か行 82~202

か	82
き	120
く	143
け	158
こ	176

さ行 203~308

さ	203
し	222
す	272
せ	283
そ	302

た行 309~372

た	309
ち	324
つ	342
て	343
と	357

な行 373~392

な	373
に	377
ぬ	386
ね	387
の	391

は行 393~492

は	393
ひ	411
ふ	433
へ	463
ほ	473

ま行 493~517

ま	493
み	499
む	503
め	506
も	514

や行 518~536

や	518
ゆ	523
よ	529

ら行 537~568

ら	537
り	543
る	559
れ	561
ろ	565

わ行 569~570

付 録

薬剤学用語集	571
生物学的製剤一覧表	591
放射性医薬品一覧表	592
食品添加物一覧表	593

索 引 603

あ

アイこうか I 効果 I-effect (inductive effect) → 誘起効果

アイ-ストレイン — I-strain, internal strain 内部歪みともいう。環状化合物 $A \begin{smallmatrix} \curvearrowright \\ B \end{smallmatrix} C$ において、A-B-C のなす幾何学的な角度と、B の原子価角との間に差があるとき、この角度の差は環の歪みとして現われ、化合物を不安定化する。

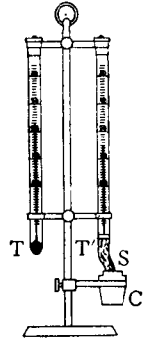
アイソザイム — isozyme 同位酵素。酵素としての機能、すなわち触媒する化学反応は同一であるが、タンパク質としては異なる酵素をいう。したがって至適 pH、基質特異性あるいは補酵素* の要求性に違いがみられることがある。タンパク質化学的には電気泳動のパターンや免疫学的性質が異なる。代表的なものに乳酸脱水素酵素* LDH があるが、これは四つのサブユニットより成り、サブユニットには2種類ある。したがって四つのサブユニットの組み合わせで5種類のアイソザイムができる。組織の分化等によって LDH のアイソザイムのパターンが変化することが知られており、また組織によってもパターンが異なる。

アイソトープ — isotope → 同位体

アイだま — 玉 アイ Polygonum tinctorium (タデ科) の茎および葉を2～3か月間たい漬し発酵させ、白でつき固めたものをいう。indigo $C_{16}H_{10}O_2N_2$ を2～10% 含有し、染料、絵具および薬用に供せられる。

アウグストかんしつげい — 乾湿計 August's stand psychrometer

図のように乾球温度計と湿球温度計を並列したもので、湿球はガーゼを一重に巻き、その端を水つぼに浸してある。両温度計の示度から気温および気湿* を測定する。



あえんか 亜鉛華 Zinc white → 酸化亜鉛

あえんかデンプン 亜鉛華 — Zinc oxide starch powder 別名酸化亜鉛デンプン。酸化亜鉛 500g, デンプン 500g, 全量 1000g。収れん薬, 防腐薬として外用散布する。

あえんか・とんしなんこう 亜鉛華・豚脂軟膏 Wilson's ointment 別名ウイルソン軟膏。酸化亜鉛 200g, アンソッコウ 15g, 乾燥硫酸ナトリウム 4g, 豚脂 740g, 全量 1000g。防腐, 収れん, 保護薬, 皮膚病薬, その他軟膏基剤にも用いる。

あえんかなんこう 亜鉛華軟膏 Zinc oxide ointment 酸化亜鉛 200g, 精製ラノリン 70g, 白色軟膏 730g, 全量 1000g。保護, 収れん, 防腐薬, 湿疹などに用いる。

あおシフト 青 — blue shift 波長シフトにおいて、極大吸収波長が短波長の方方向に移動すること。

あか [ぶんるいの] 亜科 [分類の] subfamily 多くの種*を含む科*を形質のめいりょうな相連によって分けた分類単位名で、科と属*の中間に位する。マメ科, パラ科, ユキノシタ科, セリ科, リンドウ科, シ

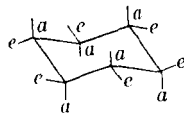
あ

あ

ソ科、アカネ科、キク科、イネ科などに用いられている。略号 Fam. (ラテン名 Familia による)。

あかしフト 赤—— red shift 波長シフトにおいて、極大吸収波長が長波長の方向に移動すること。

アキシアルけつどう —— 結合 axial bond シクロヘキサン環がイス形*をとっているとき、この環から、環の上下の方向に出ている結合のこと (→ エクアトリアル結合)。左図において、a で示されるのがアキシアル結合である。



アキシアルハロケトンそく —— 則 axial haloketone rule カルボニル基の隣の炭素の axial 位にハロゲン元素 (フッ素を除く) があるとき、オクタント則から予測される Cotton 効果*の符号が、他の置換基の影響にかかわらず、このハロゲン元素のみで決められるという経験則。

あくえきしつ 悪液質 cachexia 悪性腫瘍*、結核、梅毒* などの際に起こる体重、体力の減少、貧血、食欲不振などの臨床的症候群。この全身障害のため最終的には死に至る。癌* 組織による宿主からの栄養奪取や、癌組織から産生、分泌される液状の毒素 (トキソホルモンなど)、局所的組織破壊による機能障害、細菌感染、精神的影響などの総合的結果と考えられる。

アクジツ —— Burdock fruit 惡実、ゴボウ *Arctium lappa* (キク科) の乾燥果実で、味は油状でやや苦い。脂肪油 25~30%、arctiin を含み、消炎、解毒、解熱薬。

あくせいしゅよう 悪性腫瘍 Malignant tumor 腫瘍*には悪性腫瘍と良性腫瘍*とがあるが、両者の区別はそれほど厳密なものではなく、担体を比較的短時日中に死に至ら

しめるものを悪性腫瘍とよび、一般に癌* といわれる。これは浸潤性で、迅速に発育し、さらに転移* を起こして著しい全身的影響をもたらす。組織学的には悪性腫瘍細胞は核が多形性で通常は未分化であり、腫瘍組織としては間質が少なく分裂期の細胞を多く含む (→ 良性腫瘍)。

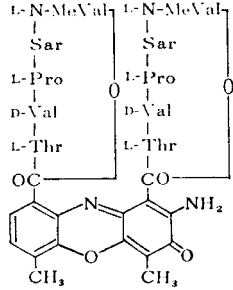
あくせいひんけつ 悪性貧血 Pernicious anemia 鉄イオン、タンパク質そのほかの欠乏による栄養貧血とは異なり、赤血球成熟に必要な因子の欠除による赤血球形成不全のために起こる貧血で、赤血球数の高度の減少をみる。しかし赤血球数あたりのヘモグロビン* 量は高い。葉酸* やビタミン B₁₂* が著効を呈する場合がある。

アクチニウムけいれつ —— 系列 actinium series 半減期* 7.1×10^8 年の ²³⁵U に始まり、²³¹Th, ²³¹Pa, ²²⁷Ac などを経て、最後に安定な ²⁰⁷Pb に至る一群の天然放射性核種の系列。この系列に属する核種の質量数はすべて $(4n+3)$ の形で表わされるので、 $(4n+3)$ 系列ともいわれる。

アクチニド actinides → アクチニド元素

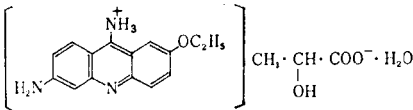
アクチニドげんそ —— 元素 actinide elements 原子番号* が 89(Ac) 以上の元素は、化学的性質などにおいて互いに類似点が多いので、総称してアクチニド元素またはアクチニド* と呼ばれる。また軌道電子の配置が希土類元素* に対応するところから、これらを第二希土類元素ということもある。

アクチノマイシン — Actinomycin
Actinomycetes からとれる抗生物質。アクチノマイシン C₁ は下記の構造である。その作用は DNA*中のグアニン残基となんらかの反応をすることを考えられる。低濃度においては酵素的な DNA 依存 RNA 合成を特異的に阻害する。したがって *in vivo* においては、全 RNA 合成を停止せしめる。



アグリコン — aglycon → 配糖体

アクリノール — Acrinol
C₁₈H₂₁O₄N₃·H₂O. mp 約 245° (分解)。黄色結晶性粉末で無臭、収れん性の苦味あり。1g は水 50ml, 熱湯 9ml, 沸騰エタノール 100ml に溶ける。希薄液は緑色のケイ光を発する。殺菌防腐薬で、内用にも外用にも用いる。



アコニターゼ — Aconitase → アコニテートヒドラーターゼ

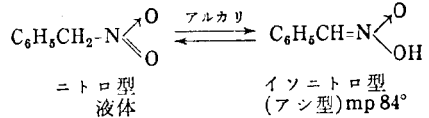
アコニテートヒドラーターゼ Aconitate hydratase 系統名 citrate (isocitrate) hydro-lyase, 酵素番号* [4.2.1.3] の常用名。アコニターゼ* ともよばれる。アコニターゼはクエン酸からシスアコニット酸を通じてイソクエン酸へ転換する反応を触媒するが、

$$\text{citric acid} \xrightleftharpoons{-\text{H}_2\text{O}} \text{cisaconitic acid} \xrightleftharpoons{+\text{H}_2\text{O}} \text{isocitric acid}$$
 かつては、この二つの反応を触媒する酵素はそれぞれ異なると思われていた。

あさんかちっそ 亜酸化窒素 Nitrous oxide (nitrogen monoxide)

N₂O. mp -90.7°, bp -88.7°. 笑気ともいわれる。無色のガスにおいてはほとんどない。本品 1ml は 20°, 760 mmHg で水 1.5ml, エタノール 0.4ml に溶け、エーテル、脂肪油にやや溶けやすい。不燃性できわめて安定である。吸入麻酔薬*として用いられる。

アシがた — 形 aci-form 酸形を示す接頭記号でケト⇌エノール互変異性におけるエノール型、ニトロ基⇌イソニトロ基互変異性的転位におけるイソニトロ型をアシ形という。これは酸性を示すからこうよばれ、ニトロ体をアルカリ処理して塩を生成する際に捕えられた。酸によりこの塩から遊離した化合物に臭素が付加することから、C=N 二重結合の存在することがわかる。



アジソンしびょう — 氏病 Addison's disease 慢性副腎皮質機能低下症。症状としては肉体的、精神的な無力症、食欲不振、低血圧、低血糖、体温調節不全など、全身の障害がみられる。最も特有な所見は皮膚および粘膜におけるメラニン色素*の沈着で、光にさらされると青銅色にみえる。副腎皮質ホルモン*の投与により症状は軽快する。

アジド — azide N₃ なる原子団を有する物質をいう。熱や光に不安定であり窒素とニトレンに分解する。有機反応において、クルチウス転位はアジドが中間となる有名な反応である (クルチウス転位)。

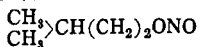
アシドバイオレット 6B — Acid violet 6B C.I. (Colour Index) 42640. 金属光沢を有する暗紫色の粉末。水に溶けて紫色を呈する。極大吸収波長 548 ± 2 mμ (0.02 N 酢酸アンモニウム溶液)。水溶液に塩酸*を

加えると、かっ色に変わる。硫酸溶液はとう色。着色料* (食用紫色1号)。

アシドレッド —— Acid red C.I. 45100. 紫かっ色粉末。水に溶けて帯青赤色を呈し、淡黄色のケイ光を発する。ケイ光は温時消失し、冷時再現する。極大吸収波長 $566 \pm 2 \text{ m}\mu$ (0.02N 酢酸アンモニウム溶液)。着色料* (食用赤色106号)。

あしゅ[ぶるいの] 亜種[分類の] subspecies 種* と変種* の中間に位置する分類単位で、形質の相違が種ほど明らかなでないが、遺伝的に確実な個体群で、その分布状態が一定地域に限られるのを特徴とし、race, vikariierende Art と称することもある。略記号は、subsp. またはssp. (ラテン名 Subspecies による) とする。

あしょうさんアミル 亜硝酸 —— Amyl nitrite bp 約 97° .



比重 0.868~0.877. 淡黄色透明の液で、特異の果実様においがあり、舌を焼くような味がある。エタノール、クロロホルム、エーテル、ベンゼンに溶け、水にはほとんど溶けない。光または熱によって変化し、揮散しやすく、引火性である。血管拡張作用があり、狭心症に吸入薬として用いられる。

あしょうさんエステル 亜硝酸 —— ester of nitrous acid 亜硝酸メチル、エチル*、アミル*などの亜硝酸アルキルをいう。水に難溶、有機溶媒に易溶、揮発性で快香がある。水にあると亜硝酸とアルキル化合物に分解する。血圧を低下させる作用があるので、医薬に用いられる。

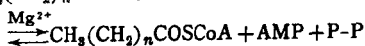
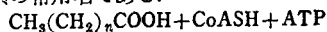
あしょうさんエチル 亜硝酸 —— Ethyl nitrite $\text{C}_2\text{H}_5\text{ONO}$. bp 17° . 特有の快香をもつ液体。アルコールと三酸化窒素の作用でつくる。吸入すれば主として胸部以上の血管が拡張するので、血管拡張薬* として用いられる。

あしょうさんカリウム 亜硝酸 —— Potassium nitrite KNO_2 . 工業的には硝酸カリウムと生石灰との混合物を加熱融解し、二酸化イオウで還元してつくる。白色または微黄色の結晶性粉末で、水によく溶け、溶液は微アルカリ性を呈する。食肉などの発色剤として用いられる。

あしょうさんせいちっそ 亜硝酸性窒素 nitrite nitrogen 動物性窒素化合物から分解して生じたアンモニア性窒素*は、さらに酸化して亜硝酸性窒素を生ずる。もし水中にこれを検出すれば、汚染の有力な指標となる。ほかの原因でも生成するが不安定であるから検出されにくい。

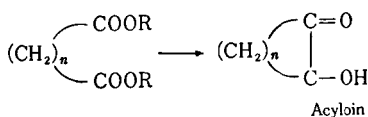
アシル —— acyl カルボキシル基の OH を除いた残りの $\text{R}-\text{C} \begin{smallmatrix} \nearrow \\ \searrow \end{smallmatrix} \text{O}$ で表わされる原子団をアシル基という。たとえばホルミル、アセチル、プロピオニルなどのようにカルボン酸の名称の語尾を“イル”に変えてアシル基の名称にする場合が多い。

アシルコエーシンテターゼ —— CoA—Acyl-CoA synthetase 系統名 Acid:CoA ligase (AMP), 酵素番号 [6.2.1.1] なる酵素の常用名である。

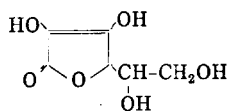


の反応を触媒する酵素で生物界に広く存在する。この反応でできるアシル CoA はアシル基の分解、不飽和化、転移などの反応に関与する。

アシロインしゅくどう —— 縮合 acyloin condensation 下図に示すような構造をもつ α -オキシケトンのアシロインといい、環を形成する際の合成法として有名。すなわち di-ester を Na-dispersion など、金属によって縮環してアシロインを生成する。そのメカニズムは、ラジカルをとおっていると考えられている。



アスコルビンさん —— 酸 Ascorbic acid
 $\text{C}_6\text{H}_8\text{O}_6$. ビタミンC. mp 約 190° (分解).
 抗壞血病性ビタミンである。白色結晶または結晶性粉末で無臭、酸味がある。1g は水 4ml, エタノール 50ml に溶け, 有機溶媒にはほとんど溶けない。酸化により破壊されやす



く光により着色する。ビタミンC不足症、壊血病の予防および治療に用いる。

アスコルビンさんナトリウム —— 酸 ——
 Sodium ascorbate 酸化防止作用を有する。肉製品の変色防止, 果実加工品のかわ変防止, ビールの風味保持, 魚介類の油焼け防止などに用いる。またビタミンC強化薬として, 果実ジュース, 果実缶詰, ジャム, ドロップ, 粉末ジュースなどにも用いられる。

アスパラギン —— Asparagine
 $\text{H}_2\text{NCOCH}_2\text{---CH---COOH}$ MW 132.12
 $\quad \quad \quad |$ mp $234\sim 235^\circ$
 $\quad \quad \quad \text{NH}_2$

α -アミノ酸の一種で, アスパラギン酸* の β -アミド。グルタミン*と同様水素結合の供与体としても受容体としても働きのうので, タンパク質*分子の二次構造*の形成や, 水への溶解度の増大に寄与する。

アスパラギンさん —— 酸 Aspartic acid
 $\text{HOOCCH}_2\text{---CH---COOH}$ MW 133.10
 $\quad \quad \quad |$ mp $269\sim 271^\circ$
 $\quad \quad \quad \text{NH}_2$

通常のタンパク質*中に広く分布する α -アミノ酸の一種。グルタミン酸と同様側鎖にもカルボキシル基をもつ α -アミノジカルボン酸で酸性を示し, したがってタンパク質*中では分子の荷電に関与する。タンパク質の酸による変性は側鎖カルボキシル基が, ---COO^-

→ ---COOH に変化することによって, 水素結合やイオン結合* がこわされて起こるものである。

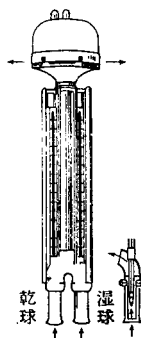
栄養学的には必須アミノ酸*に属するが, 生化学的にはアミノ基転移反応によって TCA サイクル* の中間体であるオキサロ酢酸* と相互転換する点で重要な意味をもつ。

アスパルテートカルバモイルトランスフェラーゼ —— Aspartate carbamoyl transferase 系統名 Carbamoylphosphate:L-aspartate carbamoyltransferase, 酵素番号 [2.1.3.2] の常用名。核酸のピリミジン塩基合成の第一段反応をつかさどる酵素であり最終生成物である CTP*によりフィードバック阻害を受ける。次の反応を触媒する。

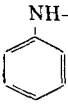
カルバモイルリン酸 + L-アスパラギン酸
 = オルトリン酸 + N-カルバモイル
 -L-アスパラギン酸

アスベストろかき —— 汚過器 asbestos filter アスベストを汚過層として使用する汚過器の総称。重量分析に用いられるグーチーろつば*, アスベスト汚過棒など, また細菌汚過器の代表的なものである Seitz 汚過器* もこれに属する。

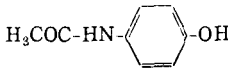
アスマンつうふうしつどけい —— 通風湿度計 Assmann's aspiration psychrometer 一定通気速度の下に乾湿球をおき, かつ直射日光の影響を防ぐようにして正確な気温および気湿*を測定する装置。1887年 R. Assmann によって考案された。図のように乾湿球をニッケルメッキの金属でおおい, 翼車によって一定速度の通風を与える。



白色結晶または結晶性粉末で無臭。エタノール、クロロホルムに溶けやすく、エーテル、水に溶けにくい。解熱、鎮痛薬で家庭薬の原料。



アセトアミノフェン — acetaminophen
 パラアセトアミノフェノール。mp 169~172°。
 白色の結晶または結晶性粉末で無臭。味はわずかに苦い。エタノール*、アセトン*に溶けやすく、水に溶けにくい。解熱、鎮痛薬で家庭薬の原料。



アセトリシス—acetolysis R-X なる化合物の -X が、酢酸溶媒中でアセトキシル基に置換される反応で、反応速度が、R-X の濃度の一次に比例するとき、この反応をアセトリシスという。

アセトン—Acetone $\text{CH}_3\cdot\text{CO}\cdot\text{CH}_3$. bp 56~57°. 無色澄明、特異臭をもつ揮発性の液体で引火しやすい。水、エタノール、クロロホルム、エーテルと混和する。溶剤、試薬、消毒薬として用途が広い。

アセトンたい — 体 acetone body
 脂肪酸およびある種のアミノ酸はβ酸化によりアセチル CoA* を生じ、通常は直ちに TCA サイクル* にはいるエネルギー生産に利用される。しかし正常な状態でも少量は蓄積され、2分子のアセチル CoA が縮合してアセト酢酸を生ずる副反応も同時に進行し、この一部は還元されてβ-ヒドロキシ酪酸となり、一部はさらに還元されてアセトンになる。これら3物質をアセトン体あるいはケトン体という。多くの組織でアセトン体生成が行なわれるが、肝以外の組織ではすぐに代謝利用されるので見いだされない。糖尿病、あるいは飢餓状態では、肝グリコーゲンが減少するため脂肪分解の亢進が起こってアセチル CoA が多量に生じ、その結果血中にアセトン体が多くなってアセトン血症 (Aceto-

nemia, ケトン血症 Ketonemia) を起こし、尿中に多量のアセトン体を排泄する (アセトン尿症 Acetonuria, ケトン尿症 Ketonuria)。

アセトンブタノールはっこう — 発酵
 acetone-butanol fermentation アセトンブタノール菌によってデンプン質、糖質原料から高収量でアセトン、ブチルアルコールなどを生成する発酵。

アセンヤク — Gambir (catechu)
 <ラ>Gambir. 漢名阿仙薬。マレー半島に産する *Uncaria gambir* の葉および若枝の乾燥水製エキスである。暗かっ色、立方形で砕けやすく、味は苦く収れん性がある。アセンヤクタンニン 22~50% を含み、収れん止薬、皮なめしに用いる。インド、タイに分布するマメ科植物 *Acacia catechu* の心材の乾燥水製エキスはベグアセンヤクといい、多孔性、不定形で同じ目的に用いる。

アセンヤクまつ — 末 Powdered gambir (powdered catechu) <ラ>Gambir pulverata アセンヤク*を粉末にしたもので、赤かっ色~暗かっ色を呈し、味は渋くて苦い。アセンヤクと同じ目的に用いる。

アゾキシはいとたい — 配糖体 azo-oxy glycoside 脂肪族アゾキシ化合物をアグリコン*とする配糖体*。日本産ソテツ *Cycas revoluta* (ソテツ科) の種子から分離された cycasin [I], neocycasin A [II], neocycasin B [III] などがある。

